

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第6号 #
南九州城郭談話会報 #
平成9（1997）年9月20日発行 #
#####

川田義朗と城郭

若山浩章

天正11（1583）年戦線を北に拡大していた島津氏は、阿蘇氏の堅志田城攻めにとりかかっていた。花山柵（現在、熊本県下益城郡豊野村所在）はそれに対抗する砦として構築された。『上井覚兼日記』天正11年9月26日条によれば（以下同書による）、この日から柵の場所探しが始まったが、実際、築城が始まったのは10月28日のことであった。軍神勧請は新納右衛門佐、鋤初は山田新介が行った。工事は11月10日には終わっているが、この間、11月2日に阿蘇方が普請に気づき道善寺之尾まで偵察に現われ、9日には花山を襲撃している。普請は敵襲を受けながらの緊張したものであったことが分かる。

同柵は2週間足らずで完成しているが、明治期の絵図や踏査見取図から、作業は帯状の郭を階段状に造成する切り通しや尾根の掘切り作業が中心であったといわれ（「花の山城」『角川日本地名大辞典 43 熊本県』角川書店、1987）、それほど堅固なものとは考えられない。やがて柵は阿蘇方に攻められ、天正13（1585）年8月12日、覚兼のもとに落城の報が入った。築城から2年足らずのことであった。

興味深いのは天正13年閏8月12日の記載である。文意が難解な点もあるが、おおよそ次の通りである。前日の11日、島津氏は隈荘を攻略するため付近の村々を破却していた。こ

れに対し甲斐宗運の援軍4,000人が近づいたため、12日覚兼等諸将は小川にいた島津義弘のところに集合し、これを迎え討とうということになった。しかし、川田義朗が日が悪い（花山落城が8月12日）と反対したのである。川田は、花山落城の原因をもちだし、築城時に軍神勧請をした新納右衛門佐が「改軍の法」に依らなかったからだとクレームをつけた。しかもこのことを島津義久にも話したらしい。義久は、改軍の法とは自分も聞いたことがない、ましてや右衛門佐が知るはずがないと言い、川田の軍神の祈念が肝要であるとしたのである。結局、義久の言は大きく川田の主張が通り、攻撃は取りやめになった。今は改軍に適した時期ではない、改軍の法に背けば花山の二の舞になるということだったのだろう。義久をはじめ諸将は、川田の発言を重視していたのである。

川田が島津家中にあって軍術家であり、修験者の風情で鬨によって重要な戦略決定に影響を与えていたことは、福島金治氏の研究（『領国支配における『鬨』の機能』『戦国大名島津氏の領国形成』吉川弘文館、1988）や永松敦氏の研究（『島津氏と修験道』『狩猟民俗と修験道』白水社、1993）によって明らかである。「改軍の法」はよくわからないが、「天道より改軍なされ」とありマジカルな性格のものと思われる。川田の主張によれば、築城

における軍神勧請は「改軍の法」という正当な作法があるという。しかし、それは義久や右衛門佐どころか川田以外の者は誰も知らない神秘的なものだったと思われる。

このようなマジカルな作法は築城ばかりでなく、降伏後の城の受け取りに際しても発揮された。天正12(1584)年3月、島津家久は肥前の龍造寺隆信と島原に戦い勝利をおさめ、4月覚兼等は神代、伊福、森山の諸城の攻略に成功していた。4月17日条によると、伊福城にあった覚兼を15日に川田が訪れた。川田は城の牆の縄結びを改め、城戸の鎖(鎖鑰)などを受け取り加持をしている。覚兼はこれに対して礼を言っているが、この作法がどのようなものであるのか、これもおそらく川田しか知らないだろう。

しかし、これらの作法は所詮非科学的なもので、現実的な効果などが期待できるものではない。にもかかわらず義久や覚兼等家臣は、川田の言を受け入れていた。それだけ川田を信頼していたのであった。ではこの信頼の源泉は何であろうか。これは筆者の憶測にすぎないが、川田の闘や判断は、そこそこ結果を出していたからだと考えている。敗北や失敗を重ねれば信頼など得られようはずがない。彼は軍師としての識見と傘下の修験者などから得た的確な情報をフルに生かしていたと思われる。ところが川田というとマジカルな部分が強調され、軍師としての現実的な側面がよく分かっていない。

有川孝行氏の「川田城跡」(『南九州の城郭』4, 1997)に接し、義朗が軍学の知識を傾注し川田城を修築したことを知った。軍師としての川田らしい跡が読みとれないものだろうか。

城郭研究

川田城の構成

有川 孝行

川田城跡の歴史的環境については、既に会報第4号に記したので、ここでは縄張を主体に検討してみたい。

川田城跡は、標高150mの諏訪原台地を南北及び東西に走る横堀によって大きく分けて五つの曲輪から構成されており、東側を川田川が深い溪谷を成し、南側は切り立った断崖で自然の要害を成すなどして「四神相応の地形」を形成している。

城内は大小五つの曲輪から構成されているが川田城跡の主郭部と言われる曲輪1は、南北約85m、東西約90mあり、城内で最大規模の曲輪である。中央部には高さ1m程の土盛があり、その一部に石列が見られる。川田氏第12代駿河守義朗は、修行者で祈禱を用いたと言われることから、それに纏^{まつ}わる遺物とも考えられる。北側には高さ約3m、幅約4mの大規模な土塁がほぼ完全な形で残っており、一部には石垣(石積み)を用いたところも見られる。虎口の手前には、窪地があり、井戸跡と言われており、「三国名勝図會」にも深さ約二十尋余の古井残れりと記されている事などから水の手と考えられる。

曲輪2は、南北約40m、東西約55mあり、城内の中央部に位置し、二つの小曲輪を配した小規模な曲輪で「射場」と伝えられる。この曲輪は、南側を急峻な空堀で曲輪1と対峙し、西側を横堀を用いて曲輪5と対峙するなどして防衛を強化している。

曲輪3は、南北約60m、東西約55mあり、城内の東側に位置し、大手口からの攻撃に対して横矢を利かす形となっている。この曲輪は、北に小規模ながらも土塁が巡っており、曲輪4との間を急峻な空堀で対峙する形となっている。また、この曲輪は「練兵場」と伝えられる。

やぐら だい 櫓台 1997年の動向

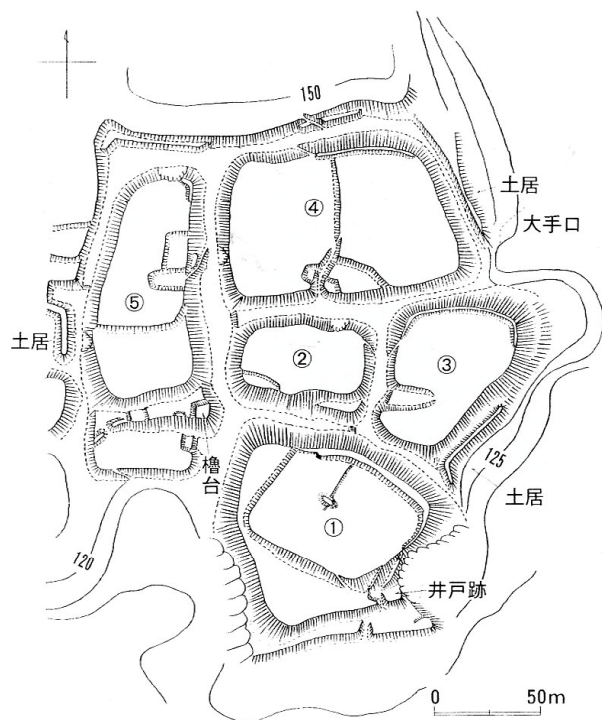
8月2日から4日にかけて、第14回全国城郭研究者セミナーが、盛岡市中央公民館を中心に開催された。「中世城館の成立について—古代末期の東北地方を中心として—」のテーマのもと、全国から300人を越える参加者があった。各地の中世城館（盛岡城、春日山城、佐竹氏関連諸城、土佐の諸城、大和の環濠）、続いて東北地方の成立期中世城館（高島館、野尻遺跡、中志館跡、内沼館跡、太田谷館跡、高屋敷館跡、暮坪遺跡、駒焼場遺跡、鳥海・西根遺跡・大鳥井山遺跡・大館遺跡、平泉遺跡群）の調査報告があった。

メインのシンポジウムでは工藤雅樹「東北北部の平安時代高地性集落」、村田修三「囲郭遺跡の分類と性格」、畠山昇「高屋敷館遺跡の概要」、保角里志「山形県における古代防衛遺跡について」の報告、本堂寿一「蝦夷と夷の遺跡と隼人の遺跡」のコメントがあり、「平安期の東北には一部の竪穴住居を堀で囲む集落遺跡と全竪穴住居を堀で囲む集落遺跡が数十も発見された」ことが強調された。

質疑応答を通じ10～12世紀の住居は竪穴が主で、そのうち尾根上に存在するものにはそれを囲むように空堀・土塁が伴っており、それは防衛施設であると主張された。そしてこれらの資料を日本の中世城郭の成立にかかわるものとして検討する必要も述べられ、東北を通じて中世城郭史が豊かになった。

最終日は城郭見学会で盛岡城跡、千ヶ窪1・2遺跡、志波城跡、伝法寺館跡、釈迦堂跡と東北を代表する城館関連遺跡を堪能した。

集落遺跡を中世城郭のなかにどう位置付けるかは大問題だが、「『飛躍し過ぎた議論』にも耳を傾けることも心がけていいかなあ」、「九州でも平安期の防衛された集落に関心を集中させては如何かなあ」というのが感想である。
(三木 靖)



川田城跡縄張図

曲輪4は、北側に位置し、南北約70m、東西約110mで台形をしており、城内で曲輪1に次ぐ広さを誇っている。この曲輪は北に土塁を一部巡らし、諏訪原台地との間を幅約20m、高さ15m程の横堀で対峙している。また、南側の虎口部分には小曲輪を配するなどして柵形を形成している。

曲輪5は、西側に位置し、南北約140m、東西約45mの南北に細長い形をしている。この曲輪は、他の曲輪と違って雛壇状に曲輪を配している点が注目すべきところである。また、虎口付近には柵形を用いており、南側には約4m四方の櫓台も残っていることから防衛の強化を図ったことが窺える。

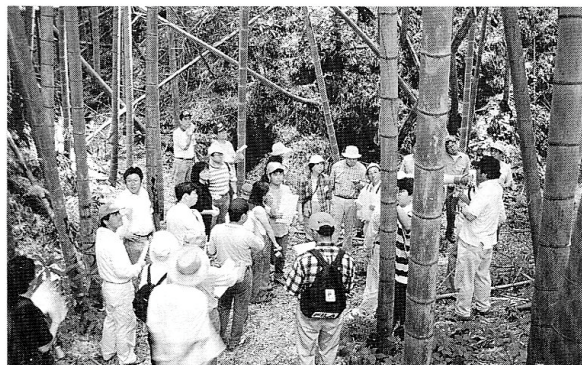
以上の五つの曲輪は、独立的でありながらも、各曲輪には小曲輪を付随し、横堀を巡らすことで防衛機能を強化している。また、虎口部に柵形を取り入れるなどして、より一層防衛機能を高めるなど堅固な城となっている。遺構の残存状況、纏まりの良さなどから考えると極めて貴重な中世城館である。

◆◆ 第 6 回見学会・例会報告 ◆◆

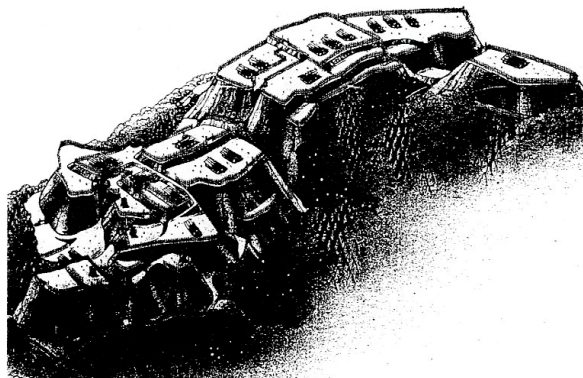
今回は 6 月 28 日（土）に宮崎県民文化ホールで開かれた宮崎県埋蔵文化財センター主催のシンポジウム「日向の城を読む」に合流し、翌 29 日倉岡城と穆佐城を見学した。初日は中型台風 8 号の接近でジメジメとした大荒れの天気となったが、午後から落ち着き、見学会は台風一過の快天の日和であった。参加者は、初日が約 200 名、29 日は約 50 名であった。

◎シンポジウム「日向の城を読む」

- 宮崎県文化課の吉元正典氏が「日向の城について」と題して、現在までの中世城館調査や発掘調査の成果をふまえながら全体的な概要を説明した。確認数約 400 ヶ所。方形館跡や水軍のための浦城の事例が注目された。
- 次に国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏が「中世の城館を歩いてみよう」と題して講演した。畝状空堀群、横堀、城内の建物群、呪い、籤・火色・修験などの精神的な世界等に触れられた。整備・活用ではイギリスの 14 世紀のマウントフィッシュ城のスライドによる紹介があった。舞台狭しと動き回ってのユーモアたっぷりの熱演は、中世の城といういかにも暗く重い内容を、分かり易くまた楽しいものとして聞くことができた。



倉岡城堀底にて立往生（平成 9 年 6 月 29 日）



穆佐城予想図「高岡町の文化財」表紙より

- パネルディスカッション「日向の城を考える」は北郷・千田・上田・若山・緒方・桑畑・吉元の 7 人のパネラーによって行われた。若山氏の上井覚兼日記にみる紫波崎城内の人々の臨場感溢れる様子の話が、発掘調査では全く窺うことの出来ない部分で興味を引かれた。山城調査における文献史料の重要性を改めて認識することであった。

◎見学会 1 倉岡城跡（宮崎市大字糸原）

高岡町道の駅ビタミン館に集合、10 時に出発した。大淀川の左岸南側に張り出す独立丘陵上にある。地形を最大限に利用した深い横堀が特徴である。下草が繁茂し、蚊や虫が多く全体を廻ることは出来なかった（写真）。

◎見学会 2 穆佐城（高岡町大字小山田）

穆佐院は平安時代の和名抄で知られた古い地名であり、また、城は三俣院高城・新納院高城と共に日向三高城と呼ばれる名城である。大きく 4 の区画に分かれ、両サイドが防衛機能、中央が政治・居住機能の施設が配置されている。空堀・曲輪等の整然とした残存状況・各区をつなぐ機能性・全体のまとまり等風格の漂う、まだ何かを秘めた只者ではない城郭と思うことであった。（出口 浩）

薩摩国伊作城の登場

三木 靖

薩摩国伊作城は、鹿児島県日置郡吹上町中原に築かれた山城である。

当時、この地は鎮西島津荘薩摩方に属し、伊作荘と表現されることのある地域であった。同荘では郡司重澄の子孫の伊作氏が下司職を有し、地頭職（郷地頭職・一分地頭職ともいう）は島津荘惣地頭島津氏一族が有していた。鎌倉後期には両者は荘務をめぐり衝突し、1279年から訴訟になり、幕府によって1324年迄の間に4次にわたる大がかりな調停があった（「正応2（1289）年1月17日伊作荘領家雑掌地頭代等与状」）。その書類には地頭屋敷はとり上げられているが、伊作城はとり上げられていない。この時点まで地頭が伊作城を築城したことは確認できない。

1324年、両者は「元亨4年8月21日伊作荘日置北郷両家地頭和与状」によって伊作荘の土地を折半することにした。それによれば伊作川を境に南を地頭分、北を領家分と折半した。なお、同川の用水権、漁獵権は共用であった。そして、同和与状によれば、領家方荘庁と宿神は現在川の南にあり、地頭方の諏訪大明神と地頭所、地頭被官輩住屋は川の北にあるので、翌年2月までに領家関連の施設は川北の領家分に、地頭関連の施設は川南の地頭分に移すことになった（その他は略すが、領家と地頭の権限の基本部分が川を境にして区分された。）。

このように、当時地頭関連の施設で同川の北にあるのは地頭所・被官屋敷・神社であり、現在、諏訪神社は同川南の湯之浦地区の麓に続く南の丘の頂上の西寄りの場所にあり、書類通り移されている。従って、現在同川北にある伊作城が当時そこにあったとすれば、移すことはできないとしても何らか言及（使用禁止等）されるはずで、それがいないことより1324年当時伊作城は存在していなかったと考えざるを得ない。前記のとおり、これ以前に地頭が伊作城を築いたことは確認できないとしたのは、地頭が伊作城を築いていなかったためだったのである。

1337年6月同荘南隣の阿多の領主益山四郎等が同荘の中原に「城郭を構え」立て籠もった。彼らは「中原城を築いた」ともいわれていて、地頭屋敷のある同川の南を迂回して川北の中原に築城したわけである。これに対し、伊作島津氏は川北は地頭領ではないが同11日負傷者6人を出しながらも、中原城へ押し寄せ攻め落とし益山等を討ち捕った（「建武4年8月3日島津道意合戦負注文」）。その中原の地に築かれた中原城の位置を「宮内」付近とする伝承がある（『鹿児島県の中世城館跡』）。が、地形上にはそれらしきものを認めることはできない。従って、この中原城は伊作城を含む「中原」地域に築かれたと考えざるを得ない。

1346年4月から8月、他荘園勢が同荘の田尻名・坂本名・今田名の地に築城し籠城した（「貞和2年9月伊作荘名主等連署注進状」）。そこで早速地頭伊作島津氏は、領家方現地役人の許可も得て名主直人等と共に中山城に入り前記の三か城を攻め落とし、その後他荘園勢が来るとの報に地頭代官と名主直人等が中山城に籠城した。

この中山城は田尻名・坂本名・今田名の地に築かれた城に対抗する城であった。ところで田尻名は現在の大字田尻の地であり、今田名は現在の大字今田の地であり、坂本名は現在の大字中原の中の小字坂元の地であり、前記の三か城はそれぞれの地名の場所に築かれたのである。これら三か城の中原名の西側から北側にかけて位置しており、それに対して築かれた中山城はこの三か城に対する城郭であるから、その位置は大字中原の小字坂元の地よりも東側のはずである。しかも、中山という名称にふさわしい地域という現在伊作城のある場所とせざるを得ない。

即ち、かつて益山氏等が築いた中原城は現在の伊作城を含む「中原」地域と考えたが、中山城は現在の伊作城のある場所だったとしないといけない。中原城と中山城が同一のものかどうかはさておくとしても、1346年に伊作島津氏が現在の伊作荘の場所に中山城を築いたのである。かくして中山城は伊作城の前身だったと見るのが妥当であろう。がもしそうでなくとも、1324年には伊作島津氏の城

郭は存在しておらず、また現在の伊作城は築かれていなかったにもかかわらず、1337年と1346年の合戦を契機に同氏が伊作荘内に、住民等と共に城郭を築いたことは間違いない。

その後、1432年に伊作島津氏の教久が伊作荘北方と西之城を宛行われている（「永享4年10月11日島津用久宛行状」）。この西之城とは伊作城を形成している曲輪のひとつを西之城と呼んでいることから、当時はこの西之城という言葉が伊作城を指したと考えられる。そうだとすれば、伊作島津氏が伊作城を安堵されたことを意味している。伊作島津氏は15世紀前半には島津荘を全面的に領有するようになり、その本拠は伊作城であったことになる。ところで、伊作城を築いた時期については、この後南北朝初期に南九州（薩摩大隅日

向）各地には一気に中世城郭が登場するので、史料上は「城郭を構える」即ち築城するとはいわないが、城郭を構える雰囲気醸成されていたことを付け加えておきたい。

今回は、南九州の中世城郭には、地頭が住人と共に立て籠もることが成立の契機となったものがあること、その時期は鎌倉末期以降であることの二点に、特に注目したい。

参考文献

拙著『薩摩島津氏』（1972年6月）

拙論「薩摩国伊作城の縄張」（1993年3月）

拙著『薩摩国伊作城縄張調査報告書』（1994年3月）

拙編著『鹿児島県の歴史』（1997年2月）

なお、史料は全て『島津家文書』に依っているが紙数の都合で出典を省略した。

熊本県城郭関係文献・調査報告書

（鶴嶋 俊彦）

古代山城の「鞠智城跡」は1968年以来17回の調査が実施され、熊本県教育委員会から複数の調査報告書が刊行されており、現在も調査は継続中である。他に菊鹿町刊行の「鞠智城跡調査報告書」1981がある。中世城館・近世城郭については、1978年刊行の「熊本県の中世城跡」（熊本県教育委員会）に文献解題があり、1979年刊行の「日本城郭体系」18 福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社）では、城郭一覧とともに文献・絵図目録が掲載されているので参照されたい。以下、1979年以降に刊行された調査報告書をあげる。

- 桑原憲彰『中世の遺構・遺物』『羽山塚古墳調査報告書』九州産業交通株式会社 1979（中世期溝の調査）
- 赤瀬 恵『村山遺跡調査報告書』人吉市教育委員会 1979（土塁遺構の調査）
- 大田幸博他『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』熊本県教育委員会 1980
- 大田幸博他『八代城跡』熊本県教育委員会 1981（二の丸の調査）
- 木下洋介『宇土城跡（城山）』宇土市教育委員会 1981（本丸整備のための調査）
- 安達武敏他『宇土城三の丸跡』宇土城三の丸跡発掘調査団・熊本勤労者住宅生活協同組合 1982
- 木下洋介『宇土城跡（城山）』宇土市教育委員会 1982（本丸・内堀跡の調査）
- 大田幸博『中世城・館跡』『荒尾市の文化財（Ⅰ）』荒尾市教育委員会 1982（筒ヶ嶽城跡他収録）
- 平山修一他『田平城跡』宇土市教育委員会 1983
- 下村悟史『原口城跡』合志町教育委員会 1984
- 高木恭二他『宇土城跡（城山）』宇土市教育委員会 1985（本丸整備のための調査）
- 鶴嶋俊彦・和田好史『史跡人吉城跡Ⅱ～Ⅷ』人吉市教育委員会 1986～1997（整備のための調査）
- 大田幸博他『奥野城跡』熊本県教育委員会 1987（球磨郡多良木町所在の中世城跡）
- 黒田裕司『田中城跡Ⅰ～Ⅹ』三加和町教育委員会 1987～1996（戦国期田中城の整備のための調査）
- 田辺哲夫他『稲佐城跡』玉東町教育委員会 1988
- 木下洋介他『宇土城跡（西岡台）Ⅱ』宇土市教育委員会 1988（中世宇土城跡の整備のための調査）
- 大田幸博他『高城跡』熊本県教育委員会 1988（球磨郡山江村所在の中世城跡）
- 大田幸博他『山田城跡』熊本県教育委員会 1989（球磨郡山江村所在の中世城跡）
- 大田幸博他『堅志田城跡Ⅰ』中央町教育委員会 1989（下益城郡中央町所在の中世城跡）
- 大田幸博他『山田城跡Ⅱ・Ⅲ』熊本県教育委員会 1990（球磨郡山江村所在の中世城跡）
- 大田幸博他『城馬場遺跡・高城跡Ⅶ郭』熊本県教育委員会 1990（球磨郡山江村所在の中世城跡）
- 大田幸博他『河内浦城跡』河浦町教育委員会 1990（天草郡河浦町所在の中世城跡）
- 鶴嶋俊彦『矢黒城跡』人吉市教育委員会 1992（中世人吉城跡・原田城跡他周辺の中世城跡を収録）
- 大田幸博他『小川内（烽火台）遺跡』熊本県教育委員会 1992（人吉市所在の烽火台遺跡）
- 大田幸博他『高山城跡』深田村教育委員会 1992（球磨郡深田村所在の中世城跡・村誌編纂の調査）
- 松舟博満『蔵城跡』錦町教育委員会 1992（球磨郡錦町所在の中世城跡）
- 大田幸博他『龍田陣内城館跡』株式会社ハウベスト・陣内遺跡調査団 1993（熊本市所在の中世城館跡）
- 大田幸博他『堅志田城跡Ⅱ』中央町教育委員会 1993（下益城郡中央町所在の中世城跡）
- 佐藤伸二『佐敷花岡城Ⅰ』芦北町教育委員会 1995（織豊期城郭跡の整備のための調査）
- 佐藤伸二『佐敷花岡城Ⅱ』芦北町教育委員会 1996（織豊期城郭跡の整備のための調査）
- 松舟博満他『富岡城跡』苓北町教育委員会 1996（近世富岡城跡の整備のための調査）
- 佐藤伸二『佐敷花岡城Ⅲ』芦北町教育委員会 1997（織豊期城郭跡の整備のための調査）

南九州の城館における陶磁器出土状況の一例

—知覧城の陶磁器について（平泉城との比較から）—

鹿兒島県川辺郡知覧町に所在する知覧城跡では、平成4年に同町教育委員会によって試掘調査が行われ、その際出土した陶磁器については上田耕氏により編年・種別組成表が作成されている^{1) 2) 3)}。これによれば、知覧城出土陶磁器の57.2%が国外産であることが分かり、その比率の高さは大口市平泉城等の南九州の城館や、東北地方の同時期の城館の多くと傾向を同じくするものである。知覧城出土陶磁器の年代別出土量について特徴を述べると、まず14世紀後半～15世紀前半の青磁が多く出土していることや、15世紀後半～16世紀前半に多い小野分類染付皿B₁群の出土が少なく、染付（青花）の出土量のピークは16世紀後半にあるという点が挙げられる。早くより伊作島津家に味方し、三州平定の過程において島津を助けた佐多氏の拠城、知覧城では、16世紀後半の染付が数多く出土しているのに対し、逆に島津方に敗北した菱刈氏の平泉城では、16世紀前・中期の遺物の豊富さが永禄期頃を境に一転、16世紀の後期の出土陶磁器は、それ以前よりも大きく減少している。対照的な二つの城の陶磁器の出土様相は、二つの城の政治的な明暗を物語っているかのようである。器種別の組成についての特徴としては、知覧城では染付碗が66片に対して、染付皿が45片と染付碗より少ないという点が挙げられる。平泉城や福井県一乗谷では染付皿の方が多く出土している。知覧城の染付皿の少なさは、前述した染付皿B₁群の出土が少ないことが直接の原因であるが、表に示した平泉城における曲輪別陶磁器出土数は、知覧城の出土状況を理解するための一つの見方を提示してくれる。平泉城の曲輪1では染付碗に対する染付皿の数は2倍程度多いが、染付碗の染付皿に対する少なさを補うかのように

橋 口 亘

青磁や他の碗が出土している。一方曲輪6では、逆に染付皿の染付碗に対する少なさを白磁皿が補っている。これは一つの生活空間の単位としての曲輪内で、ある程度完結した形での陶磁器の使用が行われていたことを示唆するものである。知覧城の場合、白磁皿が63片の出土となっており、この白磁皿の豊富さが染付皿の不足を補っていたのではないかと考えられる。(土師器皿の出土割合も平泉

大口市平泉城跡曲輪別陶磁器出土数一覽表 (破片数)

曲輪 1

	青磁	白磁	染付	その他
碗	1 1	4	1 4	6
皿	1	7	2 8	1 1
その他		2	1	1 4

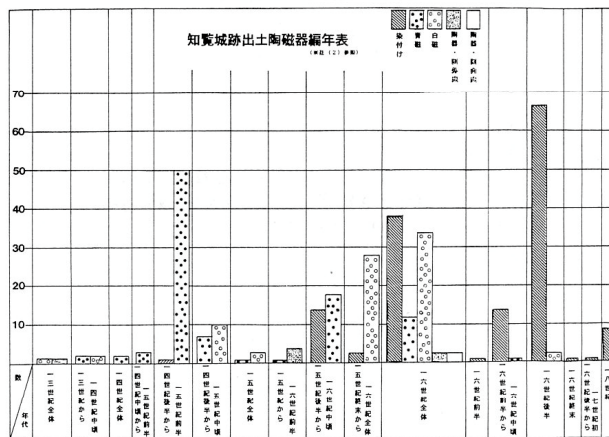
曲輪 6

	青磁	白磁	染付	その他
碗	7	6	29	
皿	1	33	11	10
その他	2		3	8

※ 盤、碁笥底皿、浅い土師器坏は皿へ入れた。

曲輪1の土師器片数は曲輪2出土との合計数(10片)。

『平泉城跡』大口市教育委員会 1982年にに基づく。

[illegible]

城より高い)。

以上、知覧城出土の陶磁器について、平泉城と比較しつつ述べてきたが、今回はあくまで試掘調査の結果に基づく考察であり、知覧城の調査が進むにつれ、陶磁器の出土状況が大きく変化することも予想される。今後の調査によって知覧城で使用された陶磁器の様相もより明らかになってくるであろう。

なお、本稿執筆にあたり上田耕氏の御協力をいただいた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

註

- 1) 『知覧城跡』知覧町教育委員会 1994. 3
- 2) 上田耕「中世知覧城跡について」『鹿児島史学』第39号 1993
- 3) 上田耕「中世知覧城からのメッセージ」『隼人文化研究会9月例会発表要旨』1992

参考文献

- ・『平泉城』大口市教育委員会 1982. 3
- ・小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.12 1982
- ・馬淵和雄「東海～関東地方における中国陶磁の出土状況」『青山考古』第21号 1995. 5

第7回見学会・例会案内

日 時 平成9年9月28日(日)
10:00～15:30

集合場所 芦北町社会教育センター
(熊本県芦北町) 0966-82-2213
7869-5498 7869-2015 82-2511

交通案内 国道3号線から県道芦北球磨線
芦北町立武道館横

会 順 (1) 見学会
10:00 集合
10:00 佐敷城跡見学
12:00 昼食
(芦北町社会教育センター)
※ 希望者は弁当を受け取ります。
(2) 例 会
13:00 研究発表・質疑応答
深川祐二:
佐敷花岡城跡の調査
15:30 解散

【新入会員】

(9月20日現在)

池田 伸二	桑原 正己	坂元 積夫
迫田 稔夫	柴田 龍司	高田 徹
常田 和彦	寺園セツ子	西ヶ谷恭弘
松田真一郎	室屋 雅道	

お知らせ

- ◆第8回の見学会・例会・第3回総会は1月下旬、鹿児島県知覧町で開催の予定。
- ◆1997年分の会費を未納の方は、下記の口座に振り込みを!
- ◆本会報のバックNo.1号～5号を1冊にまとめた合本1冊、1,000円にて販売致します。ご連絡下さい。

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州の城郭研究』創刊号の原稿募集

1. 論 文 400字×50枚程度(図版・註を含む)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版・註を含む)
3. 史料紹介 400字×5～20枚

編集後記

- ◆第6号をお届けします。原稿を頂きながら前号で商会でできなかった有川孝行氏の『川田城の構成』、鶴嶋俊彦氏の『文献』を掲載いたします。両名には大変ご迷惑をお掛けいたしました。お詫び致します。今後とも、宜しくお願い致します。
- ◆若山浩章・有川孝行両氏による川田氏についての論考は、中世における精神世界の一面をクローズアップしており、今後の城郭調査の方法に示唆するものがあります。新たな方向性を示すものといえよう。
- ◆次号の会報発行は、12月下旬の予定です。
(Shige)

南九州の城郭 第6号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-37850)
発行者 三 木 靖
印刷所 (株)ト ラ イ 社
入会金500円 年会費1,000円